



魚鐘

住所：宮前2-11-6 電話：3333-7451

最寄駅：京王井の頭線、富士見ヶ丘下車。五日市街道方面へ徒歩約14分。



▲魚鐘さんの外観

■目を引く大きな看板と趣ある外観

五日市街道沿いに、「魚鐘」(うおかね)という大きな看板と昔ながらの趣をそのまま残す一軒家があり、通る人の目を引いている。天気の良い日には、その店の外観に惹かれ、スケッチする人や、カメラに収める人を見かけることしばしば。店先には魚のショーケースが見えるが、魚が並ぶことはなく、なんとも不思議なお店だ。さっそく、お話を伺ってみることにした。

話して下さったのは宇田川登さん、「魚鐘」の2代目だ。登さんの父であり、創業者の鐘助さんの「鐘」をとって、店の名前にした。もともとは農家を営んでいた家の7番目の子として生まれた鐘助さんだが、店を構える前は、実家である本家で魚を仕入れて、天秤棒を担ぎながら地下足袋で魚を売っていたという。その後独立し、今のところに店を構えたのが、昭和12年8月。それは、家の大黒柱に刻まれている。以来、ほとんど手を加えることもなく、当時の姿そのままの家屋を守っている。ちなみに、看板だけは変わっていて、今が3代目。昭和46年からというから、今の看板になって40年近くになる。初代は黒塗りに浮き彫りの金文字だったそう。

■戦後姿を変えてゆく周囲の中で

魚鐘が始まった当時、昭和のはじめの富士見ヶ丘は、道路も舗装されておらず道端に

は砂利があり、家と家の間には畑や雑木林があるような静かなところだった。戦後の復興が進むとともに道路も舗装されていき、昭和50年頃からはそれまで一軒家ばかりだった街並みから、マンションがあらちちで建つようになった。

「昔はこの辺は

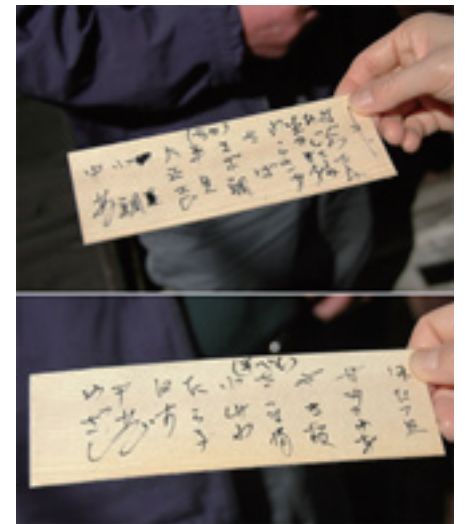
雑木林多くてね、うちの裏も、本家の庭だった林があったんですよ。前の通り(五日市街道)も、舗装されたのは昭和30年ごろだったかな。今は通り沿いもマンションなんかたくさん建ってますが、家も向かい側に植木屋をやった親戚の家があったぐらいでね。隣の春日神社も、柵などなくてね。ひよひよい入って遊んで、叱られたりしたもんですよ」と登さん。周囲が大きく変貌を遂げていく中、第二次世界大戦も焼けることなく残った魚鐘は、その姿を残し、今に至っている。



▲昔の様子を語る宇田川さん

■お昼に注文を聞いて夕方に配達

店頭販売よりも御用聞きが中心の魚鐘。午前中に築地に仕入れに出かけ、その日の魚のリストを手板(値段などを書く札)に書く。それを持ってお昼過ぎには、初代の頃は自転車で、2代目になってからはバイクでぜひおなじみさんのお宅を周り、その日の注文を聞いてくる。そうして注文を受けた魚をさばいて、夕飯前の夕方に届けに行く、という昔ながらの商いの仕方を、今も守っている。



▲注文をとるための手板

「昔からのお得意さんもみんな年を取ってしまっ、ずいぶん御用を聞きに回る家も少なくなっちゃったんだよ」と2代目は少しさびしそうに話してくれた。

高齢化社会を迎えた今、食品の宅配サービスが改めて注目されている。有機野菜専門やレトルト食品セット、ネットでの注文形式など、サービスは多様化している。そのルーツともいえる「御用聞き」は、古き良きお客さんの生活にいていねいに寄り添ったサービスだと言えるのかもしれない。都市化が進む現代で、その建物もさることながら、細々ながらも「御用聞き」という仕組みが今もまだ続いていることに、何かほっとするような温かさを覚えた。

(執筆・野上優佳子 撮影 チューニング・フォー・ザ・フューチャー)